転生、そして・・・・

桐生　セイジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生、そして・・・・

【Ｎコード】
Ｎ２２４８Ｚ

【作者名】
桐生　セイジ

【あらすじ】
ありがちでベタベタな転生物の習作的な何かです。
剣あり、魔法ありありがちな作品にしたいと思ってます。
処女作で拙い文章かとは思いますがお読みいただければ幸いです。

0．0　はじまり的な何か（前書き）

昔作ったゲーム用のプロットをそのまま焼きなおしてみた。類似してる作品が無いと良いなと願う次第。。。。（調べた限りは無かったが。。。。）

0．0　はじまり的な何か

最初に虚無があった
初めに神が生まれた
神は言われた「大地よあれ」
神は言われた「空よあれ」
神は言われた「海よあれ」
そして最後に神は言われた「時よあれ」

そして・・・・時は動き出す
どうやら、この世界の神は怠惰だったようだ。

どうやら私は死んでしまったらしい。
らしいというのは、私には死んだ記憶がないからだ。
いや、記憶が無いという事は実は植物状態で死んではいないのかも

しれない。

しかし、私がどういう状態なのかはどうでもいい話である。

問題なのは、私には名前をはじめとして”大半の”記憶がないことだ。

あれ？死んだら脳が働かないから記憶は無いのが普通なのか？

まぁ、だからといって今のところ不都合がある訳ではない。

少なくても私は動けないし、すぐに何等かの不都合は生じないだろう・・・

『眠い・・・・』

そして、私はなぜか無性に眠くなってきた。

なんだ、これは？

選択肢？

『まぁ・・・いいや・・・』

私の意識は深い眠りへと落ちていった。

0．0　はじまり的な何か（後書き）

実際、ここまでは独創性のかけらもないと思っている。
今後の展開に期待したい。。。。

0．1　独り言的な何か（前書き）

表現って難しい。。。。

0．1　独り言的な何か

私は暗い所でなにやら温かいものに包まれている。
まぁ、それはどうでも良い事だったりするのでここでは置いておこう。

幸いな事に考える時間だけは沢山あるようなので、ここで少し私のいる世界について整理がてら説明しておこうと思う。

私の今居る世界は、この世界では神々の栄光の世界と呼ばれている。
簡単に言ってしまえば異世界だ。

異世界と言っても、私が前に生きていた世界と根本的な物理法則などは変わらないらしい。

幸いな事に、記憶喪失とはいえ学問的な事は覚えているのでこの世界でも何とかやっていけそうだ。

おっと、忘れてはいけないのがこの世界にはどうやら魔法があるらしい。

まぁ、魔法の詳細についてはおいおいやっていく事にしよう。

ここで一番説明しなければいけないのは、なぜ私がここまで知っているかという点だと思う。

どうやら、この世界には、某ゲームのようにスキル的なものやパラメーター的なものがあり、私は先天的なスキルを幾つか保持してい

る。

現在持っているスキルで持っている事がわかるものは、
転生者の大半が持っている「記憶を受け継ぐ者」
思考能力を引き上げる「覚醒」
そして先天的に知識を持っている「賢者」
この３つだ。

やれやれ、覚醒があるとはいえ生まれる前の胎児にとってはかなりの負担に成ってるようだ。

今回はここらで寝るとする・・・か・・・・

0．3　続独り言的な何か

やぁ、久しぶりだね

私の方は相変わらずの状態だよ。

今回は、前回後回しにした魔法の話をしようか。

この世界の魔法はどうやら『世界を騙す』事により効果を発生させるらしい。

突然『世界を騙す』と言われてもわかりにくいよね？

人がそうだと信じ込めばそれが実現されると表現すればわかりやすいだろうか？

例をあげるならば・・・そうだな・・一般人を宮廷魔法使いにしたら『宮廷魔法使いならば凄い魔法が使えるだろう』という期待がありるから、『本人に魔法を使用するイメージがあれば』凄い魔法が使えるといった感じかな？

私もあくまで知識として知っているというだけだから、上手い例えが出てこないなぁ・・・

まぁ、本人のイメージの強さ次第で魔法が使えるようになるから、あまり意味があるとは思えないけどね。

とりあえず、上手い例えは後日への課題という事にしようか。

さて、そろそろ時間のようだね。

私はそろそろ寝る事にするよ。

では、また会おう。

1時間後、とある辺境の町で1人の子供が生まれた。

その子供が今後どのように成長するのか、この時点では知る者はいない。。。。。

1．0　誕生的な何か

やぁ、また会ったね。

うん、まずは現状を説明しよう。

とりあえず、私は生まれた。

当然の如く0歳児として。

当然の事ながら、自分では動けないし、喋れない。

つまりは、何も出来ないに等しい訳だ。

当然の事ながら、見えるものは観察し、聞けるものは聞き情報収集はしている。

だが、所詮は0歳児の私の回りにあるものなどたかがしれている。

魔法を使って多少は感覚を強化してるとはいえ、当面は出来る事は無さそうだな・・・

「・・・・アダムは寝ているのかい？」

「さっき寝たばかりですわ」

おや・・・父が帰ってきたようだ。

せっかくだから両親について簡単に説明しよう。

父親は一応騎士らしい。

まぁ、産まれたばかりの乳飲み子の前で、わざわざひけらかしたりもしないだろう。

母親はこれといって仕事をしている訳では無いようだ。

私が産まれたから一時的に子育てに専念しているだけかもしれないが・・・

まぁ、美人ではある。

美人に母乳を飲ませて貰っている訳だからある意味ラッキーなのだろう。

母親ではあるが・・・

さて、そろそろ疲れたから失礼するよ。

1．1　日常的な何か（前書き）

土日はおやすみれふ…

１．１　日常的な何か

やぁ、元気だったかい？

さて、とりあえず前回より半年たった訳だが、ある程度わかった事を説明しようか。

今は帝国歴１３年

つまり建国から１３年しかたっていないらしい。

そして、魔法に関してわかった事は１度に１つしか使えないらしい。

と言いつつも私は「幻影」と「実体化」の魔法を常時起動しているから、恐らく一般魔法（一般的に使われる魔法だからこう呼ぶ事にした）で適応されるルールだろう。

あぁ、あと父の名前がアーウィン・ロレンスで年齢が２２歳、母がリデア・ロレンスで１８歳らしい。

家があるのは帝都である。

とりあえずこんなものだれうか？

まぁ、こんなもので今回は失礼するよ。

1．1　日常的な何か（後書き）

早く学園編まで入りたい…

1．2　発見的な何か

やぁ、元気だったかい？

前回から3カ月ぶり、つまり私は7カ月になった訳だ。

そして、色々考えてて気づいたんだ。

私の日頃いる部屋には魔法を使った照明器具が設置されているが、それは入口付近のスイッチらしきものによって管理されているらしい。

まぁ、それだけならどうという事は無いんだが、私は気付いたんだ。

どうやら、この世界の魔法には距離が関係ない。

それがどういう事かと言うと、私が生み出した魔法を使えば私はベットに寝ながらにして『外の世界を旅出来る』という事だ。

つまり、私が遠隔で人の幻影を生み出し、それに実体として活動出来るものを付与する事で、平たく言えば幽体離脱したものに実体がある状態を生み出す事が出来るという事だ。

そして、魔法を使ってモンスターを倒せば経験値が手に入る・・・

これは基本中の基本だ。

上手くいけばチート級の成長が出来るのではないだろうか？

これは試してみる事にしよう

1．3はじまり?的な何か

やぁ、久しぶりだね。

といっても前回からほとんど時間がたってない訳だが・・・

とりあえず、試してみよう。

『幻影』・・・よし上手く発動したようだ。

ベッドの横にぼんやりとした白い固まりが見えている。

あー・・・どのような姿にするか指定しないとダメか。

とりあえず、私が成長して15歳になった位にしておこう。

そう決めた途端白い固まりは銀髪の美少女へと変わっていく。

あぁ、説明してなかったかもしれないが、私は自分自身が産まれる前に自分を対象に『幻影』の魔法を掛けた上で『実体化』の魔法を掛けている。

つまり、私は本当は女なのだ。

まぁ、ここではあまり関係無い話なので実験の方を進めよう。

次の段階として『実体化』を掛ける。

そして自分自身を抱き上げる。

成功だ

とりあえずベッドへと戻し魔法を解除する。

これて成長を待たなくても冒険が出来る。

あ、何か空間把握系の魔法を使わないと状況がわからないぞ・・・

『遠視』を使えば行けるか？

その辺は実地で試す事にしよう。

モンスターのドロップは、異次元にでも部屋を作って保管すれば良いか。

使えば使うだけステータスは上がるようだし、がんばろう。

とりあえず、軽く探索に行く事にし、家の外に魔法をさせる。

『遠視』を幻影の目の部分を起点として発動する事で視野を確保して、帝都内を散策してみる事にする。

私が済む家は住宅地にあるらしく、周辺にはほとんど人がいない。

まぁ、昼だしな・・・

とりあえず、賑やかな方に向かう事にしよう

1．3はじまり?的な何か（後書き）

ちょっとは進んだかな・・・？

1．4　外出的な何か

私はにぎやかな方へ歩を進めた。

どうやら、家の前の通りは大通りに続いているらしい。

（ほう・・・結構広い通りだ。）

恐らく帝都でも大きい通りに入るのだろう、店が立ち並ぶ通りへ出た。

（あれは・・・武器屋か？こっちは宿屋っぽいな）

それぞれ建物の入り口に剣やベットをあしらったエンブレムが掲げられている。

おそらくそれが各店が何を扱う店であるかを示しているのだろう。

（しかし・・・いまの状態では行く必要もないか。）

そう、なにせ今の私はあくまでも魔法でそこにいるように見せかけているだけであり、武器や防具は装備出来ないし、食事や睡眠も必要ない状態なのだ。

（しかし、人が多いな・・・とひあえず外にでて魔法でも試すか。）

人が多いと魔法が見破られて面倒な事になるかもしれない、そう考えとりあえず外に出ようとした。

が、しかし・・・

（門はどこだ・・・・）

初めて外にでた私には門の位置などわかるはずがなかった。

（あそこで聞いてみるか）

私は目に付いた露店で聞いてみる事にした。

「あの、すみません」

「あいよ、お譲ちゃん何が欲しいんだい？」

「あ、いえ、買い物じゃなくて・・ちょっと道をお聞きしたいんですが。」

「なんだ、客じゃないのか。で、どこに行きたいんだい？」

「えっと、門の場所なんですけど・・・」

「へ？何を言い出すのかと思えば。門はこの道をまっすぐ行けばあるぜ。」

「あ、そうなんですか。ありがとうございます。」

「なに、良いって事よ。機会があったらうちで買ってっておくれ」

結構気の良いおっさんである・・・頭が禿げあがり光を反射しているのを除けばであるが・・・

1．4　外出的な何か（後書き）

1回の文章量を増やすと、書いたのを即投稿するのはどっちが良いんだろう・・・

即投稿の方がモチベーションを維持出来るかな？

１．５　捕獲的な何か

私は店の禿おやじに言われた通りを門を目指して歩き始めた。

そして私は見つけてしまった．．．

（猫耳・・・？）

そう、通りには亜人と思しき猫耳に猫尻尾の人々があるいて・・いや、良く見れば尖った耳だったり、毛むくじゃらだったりする人（？）が思い思いに歩いている。

（流石異世界だなぁ・・・）

などと思いながらも足は止めない。

そのまま歩く事２０分ほど・・・・

ようやく門が見えてきた。

（大きい・・・）

そう、門は幅１０メートル高さ１５メートルほどだろうか？

典型的なアーチ型の門である。

まぁ、門と言うからには当然見張りの兵士もいるわけだが・・

（親父か・・・）

そう、門の横の詰め所の前に何やら兵士に指示を出している父親が居た。

ばれる事は無いだろうとそのまま歩を進める。

門を出ようとした瞬間

「おい、そこのちょっと待て」

父親に呼びとめられてしまった。

「ひゃ、ひゃい、なんでひょうか」

噛んだ・・全力で噛んだ。

「ここで話すのもなんだからちょっと奥まで来てもらおうか」

「え？」

「良いから来い」

腕を掴まれ強引に詰め所の中に引っ張りこまれてしまう。

詰所の中は・・まぁ、男所帯ならではの乱雑さでごちゃごちゃした感じだ。

「とりあえず、その辺の椅子にでも座れ」

父は扉を閉め扉が開かないようにであろうか扉に体重を預けている。

（この状態では逃げ出しようがないか。）

当然、魔法の解除をすれば逃げる事は出来るが、何が起きるのかに期待しつつ私は言われた通り椅子に座る事にした。

1．6　サブタイトルと内容の関連って無いよね的な何か

「さて、貴様は何者た？」

腕を組みつついきなり核心を問いかけられた。

「わざわざ、俺の家族の姿をして目の前に現れたのだから理由が無いなんて言ってくれるなよ？」

（するどいな・・・）

「なぜ、気付いたんですか？」

「なぜ？おまえさんには生きている気配が全くないからな。気付かない方が難しいだろ」

「流石お父様ですね」

「は・・・えっ・・・お父様って・・俺がか？」

「え？気付いたから呼び止めだんじゃ・・・」

「まさか、アダムなのか？」

「正確には使い魔みたいなものですが・・・」

「マジか・・ちょっと待ってろ」

父はそう言うと慌てて外に出て何やら兵士と話している。

待つこと数分

「よし、帰るぞ」

「帰るってどこへ・・・」

「家に決まってるだろう。話しは帰ってからだ。」

こうして私の初めての冒険は1時間弱で幕を閉じたのである。

１．７　もうサブタイトルを付けないで数字だけで良いんじゃないか的な何か

お気に入りが６件・・・
そなたに感謝を

１．７　もうサブタイトルを付けないで数字だけで良いんじゃないか的な何か

そうして、先ほどたどった道の利を父の後ろを付いていく事になったのだ。

歩く事３０分ようやく家にたどり着く。

「ただいま」

父が扉を開けて入っていく・・・

（後ろについていけばいいのか？）

私はそのまま付いていく事にした。

「おかえりなさい・・・・で、後ろに居るのはどちら様？」

出てきた母は険悪な空気を纏っている。

「えーっとだなぁ、どう説明したらいいのか・・・」

「お父様とりあえず、奥の部屋へ」

「あぁ、そうだな」

「お父様・・・・・」

母が凄い形相で睨んで・・・怖い怖い

「リデア、ほら、ちゃんと説明するからとりあえず奥の部屋へ」
父が無理やり母を押して私の寝ている部屋へと押しこんでいる。
さて、すんなりと納得してもらえるものかどうか・・・

「早く説明して頂けないかしら？」
かなりイライラしているのが声を聞いただけでわかる
「少し、落ち付けって・・・えっと説明して貰って良いかな？」
「はい、えーっと・・簡単に言えば私は使い魔みたいなものです」
「使い魔・・・？」
母はよほど驚いたらしくポカーンと擬音が見えるかと思うほど驚いたようだ。
「はい、私はアダム・ロレンスによって具現化されています。」
「具現化？使い魔なら召喚じゃないのか？」
父にはある程度魔法に関する知識があるらしい。

「正確には、魔法によって生みだした幻影に対し実体化の魔法を掛けてるだけなので使い魔という表現は正しく無いですね。身代りと言った方が正確でしょうか？」

「なるほど、通りで生きている気配が無い訳か」

気配・・・か、確かに生きてる訳じゃないからそれで見分けられるだろうが・・・この父親結構強そうだ。

「逆に聞きたいんですが、なんで私を捕まえたんですか？」

「いやなに、リデアの若い頃に似ていて気配が無いからね・・・刺客かと思っただけだよ。」

刺客って・・・この親父は日頃何をしているんだろうか・・・

「つまり・・・貴方は私の娘という事で良いのかしら？」

母親は・・話を理解してたのかわからん。

「良いんじゃないか？本人なら子守を任せても大丈夫だろう。」

うわ、子育てを丸投げしやがったよこの親父

「ふふふ、実は娘も欲しかったのよねー。それでお名前は？」

名前か・・・

「名前はー・・ジョン・スミスとか？」

ジョン・スミスって・・・我ながら適当である。
駄目だこいつ早く何とかしないと、と思ったかはわからないが父も母も何やら頭痛に耐えているようだ・・・そりゃそうだわな。
「仕方ないわね、貴方はアメリア・ロレンス私の遠縁という事にするわ。」
「それが一番だろうな。」
「それはそうとあなた、お仕事は？」
「いや、ほら・・・まぁ、なんだアメリアを見つけて引っ張って・・・」
「お仕事は？」
「・・・行ってきます」
うちでは、父より母の方が強いらしい。
そうして、父はとぼとぼと再度仕事に向かったようだ。
「さて、アメリア歓迎の為に今日は御馳走を作りましょう。子守をよろしくね」
「はい、わかりました」
子守と言っても、自分の子守だからな。きっと大丈夫だと思いたい。

１．７　もうサブタイトルを付けないで数字だけで良いんじゃないか的な何か

あれ・・・土日は休みだったはｚ・・・

1．8　土日はお休みです的な何か（前書き）

そなたに感謝を

1．8　土日はお休みです的な何か

流石に自分の子守はとても楽だった。なにせ何をすれば良いかが全てわかる訳だからな。

そして、数時間が経ち夕方

「ただいま」

父が帰って来たようだ。

「「おかえりなさい」」

風呂なんて洒落たものは無いから帰宅後そのまま夕食である。

「今日は奮発して御馳走にしてみましたー」

「おぉ、御馳走だ」

「え？」

私と父のリアクションには天と地ほどの差があった。

夕食は、黒パンに、具が沢山入ったスープ、それと少々のハムという構成である。

「ふふふ、凄い御馳走でしょ？」

「そう・・ですね」

現代日本の感覚を持つ私には返す言葉も無い。さっさと食べてしまうとしよう。

そして、食後

「さて、今後の事についてだがアメリアはどうしたい？」

「えっと、冒険に出たいなと思ってます。魔法も使えますし・・・」

「うーん・・なら学校に行ってみるのはどうだい？」

「学校？学校ってお金が掛るんじゃ・・・」

「一応、王立学園なら魔法が使えればお金は掛らないみたいだし、受けるだけ受けて見たらどうだ？」

「あなた、その前に居住者として登録しないといけないんじゃない？」

「あぁ、そうかそうすると明日は居住者として登録してついでに学園に関しても調べてるか。それでいいか？」

「あ、はい・・・」

そうして夜は更けて行き、翌日に居住者登録（戸籍のようなもの）と学園の受験の手続きをする事になったのである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2248z/

転生、そして・・・・

2011年12月19日00時54分発行